

* 本稿は1993年第32回日本アメリカ文学会全国大会における発表およびそれに続く質疑応答をもとに作成されたものである。

注

- 1) Constance Rourke, *American Humor : A Study of the National Character* (1931 ; rpt. New York : Doubleday, 1953), 140.
- 2) Henry Nash Smith, *Virgin Land : The American West as Symbol and Myth* (Massachusetts : Harvard UP, 1950), 44-48.
- 3) Edwin Fussell, *Frontier : American Literature and the American West* (New Jersey : Princeton UP, 1965), 397-441.
- 4) Besty Erkkila, "Whitman and American Empire," Geoffrey M. Sill, ed., *Walt Whitman of Mickle Street : A Centennial Collection* (Knoxville : Tennessee UP, 1994), 54-69.
- 5) Thomas L. Brasher, ed., *The Collected Writings of Walt Whitman : The Early Poems and the Fiction* (New York : New York UP, 1963), 85-95.
- 6) Benjamin T. Spencer, *The Quest for Nationality : An American Literary Campaign* (Syracuse : Syracuse UP, 1957) 22.
- 7) Ralph Waldo Emerson, "Europe and European Books" (1843), *Emerson : Essays and Lectures* (New York : Literary Classics, 1983), 1250.
- 8) Brasher, 43.
- 9) Harold W. Blodgett and Sculley Bradley, ed., *Leaves of Grass* (1965 ; rpt. New York : Norton, 1973), 49. 以下、このテキストからの引用は () 内に LG と付記しページ数のみ示す。邦訳は『草の葉』杉木喬、鍋島能弘、酒本雅之訳(岩波書店、1969年)を参照した。
- 10) Gay Wilson Allen, *The Solitary Singer : A Critical Biography of Walt Whitman* (1955 ; rpt. Chicago : Chicago UP, 1985), 93.
- 11) Gay Wilson Allen, *The New Walt Whitman Handbook* (New York : New York UP, 1975), 113.
- 12) H.N. Smith, 266.
- 13) Floyd Stovall, ed., *The Collected Writings of Walt Whitman : Prose Works 1892*, 2 vols. (New York : New York UP, 1963), 2 : 371. 以下、このテキストからの引用は () 内に PW と付記し、巻数とページ数のみ示す。邦訳は『ホイットマン自選日記』杉木喬訳(岩波書店、1967年)を参照した。
- 14) *The Solitary Singer*, 462.

がこのように考える理由は、同じ『自選日記』の「詩における大草原と大平原」という文に明瞭に書かれている。ここで彼は、間違いなく新しい世代がすでに生まれており、やがて西部の大平原地帯に何百万もの人々が世界で最も栄える姿を目にすることになるだろうと述べ、続けてさらに素晴らしいのは、このアメリカ独自の地域が完全に西部の詩として歌われることだと言う。(PW1: 219) 西部の広大で豊かな平原地帯。ここならアメリカならではの暮らし、つまりヨーロッパから解放され、自由に豊かな暮らしを幾万もの普通の人々が実現することができる。東部の現実には幻滅したが、これら西部の大平原地帯になれば将来アメリカ人の理想の楽園が現れ、それをアメリカ独自の詩にする夢を見ることができたのである。こうした点をふまえると、1880年の詩「大草原の諸州」には二度目の西部訪問で得た彼の西部のイメージが明かにされていることがわかる。

創造のさらに新しい園、もはや原初の孤絶はなく、
ひしめき合い、喜悦にあふれ、現代的で、人口はなんと数百万、都市も農村もあり、
鉄の糸もて織りあわされ、さまざまな部分から成り立ちながら、ひとつに結び合った
多くの者たち、
世界全体から寄進を受け——自由の、法の、繁栄の支配する社会、
時間の蓄積の結実として、過去に正しい意味を与える、
今のところ頂点にある実り豊かな楽園。(LG402)

彼は大草原の広がりやを「頂点にある実り豊かな楽園」とよび、そこに豊かな農村と同時に繁栄する大都市を見る。ここで歌われているのは果てしなく広がる大草原のありのままの風景ではなく、西部の草原地帯が開拓されている様子を見て喚起された、将来こうなるであろうと彼が想像した西部の姿である。西部の大草原が人の手によって開墾され豊かな大地となっていく、あるいはそうなると期待できる風景は一人の詩人としての彼に自信と希望を与えたことであろう。

*

西部は詩人ホイットマンの誕生とその後の存在に深く関わってきた。若きジャーナリスト・ホイットマンは文明西進説と共に成長し、1848年の西部経験によってアメリカの可能性や多様性を実感した後『草の葉』の詩人となった。南北戦争を経てアメリカが金ぴか時代に入ると彼の作品とアメリカの現実との間には大きなずれが生じ始めたが、彼は自分の立場を変えようとせず、79年の二度目の西部訪問のころになっても彼は『草の葉』の正しさを自ら主張しなければならない境遇にあった。その時彼の拠り所となったのが西部であり、彼はそこに自分の芸術の正当性の根拠を求めながら理想の西部像を歌い続けたのである。『草の葉』の詩人は西部をきっかけとして誕生し、最後の最後に行き詰まると西部に希望を見いだそうとした。アメリカ文学のヒーローの一つのパターンが西部に帰っていく点にあるとすれば、ホイットマン自身その系譜に属していると言えるだろう。

船が、我身が、たとい何がどうなろうと厭いはせぬ。(LG421)

『民主主義の展望』の場合と同様に、物質的繁栄のみにはしり精神的にはいっこうに深まらない現実の文明に幻滅を覚え、ここで彼は現実世界よりも、未だ誰も踏み込んでいない観念の世界を選んでいる。それに伴い彼にとっての西という方角も性質を変え、現実的な希望の地としての西部というより、神秘的な観念の世界への通路となっているのである。

ホイットマンのこのような観念的傾向の背景には、アメリカ社会の現実と彼の理想と隔たりの他に、さらに個人的な事情があったことも見逃してはなるまい。1870年に兄のジェスが死亡、73年には彼自身が中風の発作に襲われ、その上同年に最愛の母親を失い、死というものがかつてない重さで彼に迫ってきていた。そして詩人としての彼の評価も確立したとは言い難かった。『草の葉』初版以来四半世紀にわたり自己のヴィジョンを歌い続けてきた彼であったが、ヨーロッパではアメリカの詩人として評価が高まっているというのに、肝心の本国では彼の『草の葉』に関して相変わらず賛否両論があり、事実1872年エマーソンが編集した詩選集には『草の葉』の作品は一つも含まれていなかった¹⁴⁾。現実世界では彼の自由にならないことが増えていたのである。

こうした流れの中で、ホイットマンの作品の中の西部は、彼個人を励まし、支える土地という性格を帯び始める。二度目の西部旅行はこの頃なされたわけだが、コロラドのブラット溪谷を訪れてその景観の雄大さにうたれた経験をもとに作った「この景観をつくりし霊よ」(1881年)には「ポーマノックをあとにして」のようなカタログ的な西部の風景描写は無く、彼は西部をいわば利用して詩人としての自分自身のためにその風景を解釈している。彼は自分の詩が「正確で優雅な芸術の規則を」忘れていると非難されたことを思いですが、奔放に展開する西部の自然風景を前に、「私の作りしものもまた、それはそれなりの理由から、いとも奔放にならされている」と考え、「しかし、この風景を楽しむあなた——この景観を作りし霊よ、わたしの歌はあなたをしっかりとおぼえていた」と言って西部の自然が自己の詩の正しさを証明していると確信する。(LG486) 同様のことは、『ホイットマン自選日記』(1882年)を読んでも感じられる。1879年の西部旅行に関する記述の一つに、雄大なロッキー山脈の景色の印象を述べた「身勝手な発見」という文があり、ここにおいても彼はその景観を描写するというよりむしろそこに『草の葉』がアメリカの真正の詩集である裏付けを見いだそうとしている。「自然の力の、厳しいがそれでいて愉快的な奔放さ」に、何の拘束も受けずにアメリカの全てを自由に歌おうとしてきた自分の創作態度そのものを感じとり、彼はロッキーの自然に「自分の詩の法則を見出した」のである。(PW1: 210-1)

しかし、1879年に訪れた西部で、彼にとって最も印象的だったのは実はこの名勝ではなく、無名だが果てしなく広がる大草原だった。『自選日記』中の「アメリカ独特の風景」と題する文には、西部の大草原や平原は最初見た時は大したことはないが結局この旅で最も印象に残ったのはまさにこの大草原であったと記され、またカンザス州でのスピーチ原稿においても彼は大草原を「この果てしない、そして堂々とした大草原」とよび、「私の初めての本当の西部訪問の中で、この大草原は最も印象深いものである」としている。(PW1: 220-1) ホイットマン

に、巨人は手放しでは喜べず、あらためて「私が思い描いた目的地はどこに」「どうしてまだ見つからないのか」と自問して歌い終えている。

続く1865年の「開拓者よ！おお開拓者よ！」でも文明西進説は明瞭に現れている。詩人は最初西部の若者に思いを馳せて「男らしい誇りと友情に溢れる」彼らが開拓の先頭に立って進むさまを讃える。やがてその隊列には北部人や南部人も加わってさながらアメリカ人の大行進の様相を呈し、ついには世界も同調してその行進を後押しし始める。G.W. アレンがこの作品では「ホイットマンを常に魅了してきた、軍隊のように前進する文明という主題」が扱われていると指摘したように¹¹⁾、「世界を巡るすべての脈拍／西を目指す動きの脈動にあわせ、それは我らのために鼓動する」と歌うホイットマンが、西部開拓は文明西進説によって約束されていると信じているのは明らかであろう。(LG231) さらに、H.N. スミスはこの作品の中心的イメージおよび多くの細部はウィリアム・ギルピンの西部体験の叙述や西漸運動の議論と酷似しており、ホイットマンは彼から直接借りていたようだと言及しているが、このギルピンこそ文明西進説の熱烈な信奉者であり、当時のアメリカ人の西部観に大きな影響を与えた人物であった¹²⁾。

先の「カリフォルニアの岸辺から西に向かって」における文明という巨人の悩みは1871年の評論『民主主義の展望』と詩「インドへ渡ろう」でより明らかに表現されている。この間アメリカは南北戦争を経て、いわゆる金ぴか時代に入っていた。人々のエネルギーが溢れかえる一方で物質欲に取りつかれてしまった、アメリカ史上悪名高き時代である。おそらく、「カリフォルニアの岸辺から西に向かって」の「私」が自問せざるを得なかったのも、ホイットマンがこうした時代を予感していたからではあるまいか。実際、それまでアメリカを讃え続けてきた彼であったが、ついに『民主主義の展望』に至ってアメリカを批判し、アメリカは物質面では成功したが、精神文化の面ではほとんど完全に失敗だったと断罪することになる¹³⁾。ところが、そうした現状を改善するために彼がこの評論で続けて行なう提案にはどこか虚しさを感じざるを得ない。理想的デモクラシーへ至る道として彼は「人格主義」を掲げるが、すでにロマン主義よりリアリズムの方が説得力を持つようになった時代の中で、彼の主張はもはやあまりに観念的に思われるからである。同年の詩「インドへ渡ろう」においては、詩人はまずはじめに世界の文明を物理的につなぐ画期的事件として大西洋海底電線の施設、スエズ運河の開通、大陸横断鉄道の完成を祝うが、やはり次第にアメリカの現実から離れ、観念的な世界へ入ってゆく。魂に対して「インドへ渡ろう」と繰返し呼びかけた後で結びに「インドよりさらに彼方へ渡ってゆこう」と歌う時、彼はインドを起点にさらに地理的に西へ進んでふたまわりめのサイクルに入ろうとしているのではなく、地上の束縛から解き放たれ深い観念の世界へ入ろうとしているのである。

旅立とう——ひたすらに深い海だけを目指して、
危険を恐れず、おお、魂よ、あまたの秘密を探って行こう、私はあなたと、
あなたは私と、
私たちこそ船乗りもかつて赴く勇気のなかった世界を目指す、

きいのである。

1860年の『草の葉』第三版では、西部と関わりを持つ詩がさらにいくつか現れている。例えば「ブロードウェイの華麗な行列」はニューヨークが舞台だが、枠組みは文明西進説の中にある作品と考えられる。詩人は日米修好条約の批准書をもって渡来した日本の使節団がニューヨークのブロードウェイをパレードした模様を歌うが、彼にとってこの出来事はアメリカが世界の文明の頂点となった証しでもあった。彼は過去の時代を思い浮かべて「それほどに長く楽園から西を目指して流れ出たのか」と問いかけるが、これまで長年にわたり地球を西進してきた文明の状況は一変したようだ。東洋の文明が東のニューヨークへ挨拶にやって来たのを目の当たりにして、彼は「地球は包み込まれ／輪が巡り終えられ、旅が終わる」と歌い、さらに「指標は逆転し始めている」とする。(LG245) こうして世界を巡る文明の輪はブロードウェイのパレードで遂に完成し、ニューヨークは世界に君臨することになる。

だがさらに文明西進説に従えば、文明の中心はいずれニューヨークを離れミシシッピ河流域に移り、最後には太平洋岸地域へ移って行くはずである。実際、同年の「カリフォルニアへの約束」はニューヨークをはるかに跳び越してカリフォルニアを約束の地として歌っている。「もうしばらくは東部にいながら」とためらいつつも、詩人の視線はすでに西へ向いている。内陸の大草原やカリフォルニアをはじめとする太平洋岸の地に対して、彼は間もなくそこへ旅立つと約束し、アメリカ的な愛は西部に属すものであり、数々の州もまた西を目指していると歌う。(LG130-1)

同じ1860年の「カリフォルニアの岸辺から西に向かって」では詩人はすでに約束の地カリフォルニアに到達しており、最も進んだ文明が現れるはずである最西部の地に立って、これまで文明が歩んできた道のりを思う。地球を巡る文明の輪が今まさに完成しつつあると感じた詩人は「喜びに胸踊らせつつ」はるか西のアジアを見つめている。

今まさに円をひとめぐりし終ろうとしつつ、わが西部の海の岸辺から彼方を見やる、
思えばかつてヒンドスタンから、カシミールの溪谷から、……

西に向かって旅立ったが、
あれ以来長々とさまよいつづけ、地球をぐるとさまよい終って、
今私はふたたび、喜びに胸おどらせつつ、故郷との対面をはたしている、
(それにしてもずっと昔に旅立ったとき私が思い描いた目的地はどこにあるのか、しかも
どうして未だに見つからないのか) (LG111)

このときの「私」は時空を自由に移動する詩人の魂であり、同時に「文明」そのものであると考えてよからう。文明という巨人が、インドから地球をはるばる一巡りしてカリフォルニアにたどり着き、はるか故郷のアジアを見やっている姿は豪快でトールテール的である。ところが、のしのしと西へ進む巨人のイメージを使えば、この文明という巨人はついにアメリカ大陸の西の端まで来たものの、どこか物思いに沈んでいるようだ。西を目指して進んで来た文明がアメリカで頂点に達し、地球を巡る文明の輪もカリフォルニアでめでたく完成するというの

台がミシシッピ河であるという点では西部の詩とよびうるが、それ以外は伝統的であって、『草の葉』に通じるような作風の変化はまだ見られないのである。

詩人ホイットマンの劇的な変化は旅の7年後に『草の葉』初版の中でようやく形となって現れる。「ぼくは拡大を讃え、自尊の賛歌を歌う／こそこそしたりおずおずしたり卑屈な真似はもうたくさんだ／大きくたってこちらも大きくなればすむことじゃないか」(「私自身の歌」)⁹⁾。『草の葉』で初めて現れたこうした無限の拡大や楽観性といったホイットマンの基本的イメージが西部をめぐる当時の状況なしに考えられないのは言うまでもないが、一度目の西部体験との関わりで見逃せないのは、この詩集がアメリカのあらゆるものを取り込もうとしていたという点だ。オハイオ河を蒸気船で下った時、満載される物資を目にして初めて彼は「成長する国家の途方もない広さ、可能性、多様性そして豊かさ」を理解したとG.W.アレンが指摘しているように、『草の葉』の詩人となるべきホイットマンにとってこの旅の意義は、西部と南部それぞれの土地の特徴を知ったことより、むしろアメリカがそうした雑多な要素を同時に豊かに抱えていることそれ自体を実感したことにあっただけと言えよう¹⁰⁾。彼は『草の葉』初版の序文で「アメリカ合衆国そのものが本質的に最大の詩篇である」とし、アメリカの詩人はアメリカを「西から東まで」余すところなく歌うのだと宣言する。(LG711-3) 西部の経験はその後7年の間に、アメリカの「途方もない広さ」「多様性」「豊かさ」を表現できない詩集はアメリカの詩集とはなりえないという確信へと熟していったと考えられるが、この点で『草の葉』は西部から生まれた詩集なのである。

あらゆるものを取り込むことが彼の考える本物のアメリカ詩に不可欠ならば、彼が『草の葉』でいわゆるカタログ技法を用いたのも不思議はない。この表現法によってあらゆるものを同時に大量にそして平等に作品の中で歌うことが可能となるからだ。実際、彼は「私自身の歌」や「ポーモックをあとにして」(1860年)などでカタログを使いアメリカ各地の多様な暮らしを豊かに歌い込んでいった。

白人とインディアン
の混血児が競争にのぞんで軽い靴の皮ひもを結ぶ、
西部の七面鳥射ち見たさに老いも若きもやってくる、

……

新参の移民らが波止場や堤防にひしめき、
縮れ毛の黒人たちが砂糖きび畑で鋤をふるう、…… (LG42)

カタログで表現されるこれらの情景は必ずしもホイットマンが実際に目を見たものとは限らない。例えば西部の描写にしても、彼は様々な書物や絵画を拠り所としている。すでに言葉や絵に転化された西部を、自分の心の中にある西部のイメージのフィルターを通して再び作品に表現しているという意味では彼自身が神話あるいはメタファーとしての西部をカタログによって作りだしていると言える。だが、リアリズムであれメタファーであれ、アメリカ詩のあるべき姿について実際に体験した西部から示唆を受け、カタログ技法がそれを具体化するための重要な手段となっているという点で、ホイットマン一流のこの技法も1848年の西部訪問の影響が大

した上で、そうした意識が西漸運動を正当化しネイティブアメリカンなどの権利を圧殺したにもかかわらず、ホイットマン自身は自分が共犯であることに十分気づいていないと述べる⁴⁾。

言うまでもなくホイットマンは基本的に都市の詩人であって、1841年ニューヨークに移り住んで以来彼は20余年にわたりこの街と関わり続け、急速に成長する都市を身をもって経験しそれを詩の中でも歌ってきた。にもかかわらずこうした指摘や研究がなされてきたのは、ホイットマンが西部の領土拡大と開拓の最盛期にあるアメリカに生き、同時代の文学や言論の中の西部の影響を受けながら実際にも西部を訪れ、そしてこれらを反映する発言と作品を残しているためである。では西部は彼の中でどのような位置を占めてきたのだろうか。本論は現実あるいは言葉の西部が彼に与えた影響をふまえつつ作品をたどることによって、ホイットマンと西部の関係をまとめ直す試みである。

*

19世紀前半はアメリカが西部への領土拡大の夢を実現した時代だった。1803年にミシシッピ河以西ロッキー山脈に至る広大なルイジアナを獲得したのを皮切りに、1840年代にはテキサス、オレゴン、カリフォルニア、ニューメキシコを次々に手に入れ、名実ともに大陸国家へ成長した。この40年代はアメリカの西方進出に関して最も活発に議論がなされた時代でもあり、若いホイットマンはこのころ新聞記者あるいは編集長としてジャーナリズムの真っ只中にいた。アメリカ国民が無限とも思われる国家の領土拡大に心を踊らせた時代にあって、彼もジャーナリストとして領土拡大を肯定する発言を続ける。メキシコ戦争では、アメリカの拡張主義を擁護し、オレゴン獲得に際しても、アメリカの国土拡大を支持する社説を発表し、さらに、カリフォルニア、ニューメキシコ併合も支持している⁵⁾。

こうしたアメリカの西部進出を思想的に支えていたのが文明西進説である。この思想は18世紀に生まれたが、東洋に始まる文明の中心はギリシア・ローマ帝国を経てスペイン・フランス、そしてイギリス帝国へと交替しながら西進してきたので、次はさらに西のアメリカが必ず世界の中心になるという内容ゆえに、以来西方に関するアメリカ人の想像力を魅了してきた。第2代大統領ジョン・アダムスは「私のささやかな読書経験のなかで、芸術や科学そして帝国は西へ西へと進んできたという言葉は最も古い記憶として残っている」と述べ、またコネティカット・ウィッツのひとりであるジョエル・バーロウも文明は西へ進むと信じていた⁶⁾。さらに、ホイットマンに直接的な影響を与えたエマーソンも英語民族の中心はヨーロッパからアメリカへ移動し、西部には新しくより強力な文学が生まれるだろうと予言している⁷⁾。

初めて西部を目にした頃、ホイットマン自身ジャーナリストとして当時のこうした思潮を積極的に表現していたにもかかわらず、この体験のおりに書かれた詩「真夜中のミシシッピ河」が意外なほど控え目であったのは、この時期彼が詩作においてはいわゆる伝統的なジャンルで優れたものを書こうと努めていたためであろう。文明西進説に支えられた勇ましい西部進出の議論などまるで知らないかのような静かな詩である。「おお、とうとう流れゆく河よ！人生のはかない夢のように、先へ先へと急ぎゆく／流れよお前はこの真夜中に死のごとく、お前の冷たいしずくの中に生命をどん欲に葬ってしまう！」⁸⁾というように、この作品は「死」を主題としており、これは墓場派的作風を好む当時の詩人たちがよく扱う題材であった。作品の舞

ホイットマンと西部

檜 崎 健

ホイットマンは西部を生涯二度だけ体験している。一度目は1848年28歳の時、まだ『草の葉』の詩人となる以前のことだった。ジャーナリストとして南部ニューオーリンズで3カ月仕事をするため、彼はメリーランド州カンバーランドを越え汽船でオハイオおよびミシシッピ河を下った。アレゲニー山脈以西が西部という立場でいえば、ホイットマンはこのとき西部を体験していることになる。二度目は31年後の1879年、カンザス準州25周年記念に招待されたのを機会に、ミシシッピ河を渡りコロラド州デンバーに至る本格的な西部旅行を行う。彼はすでに還暦を迎え、1855年の『草の葉』初版から数えても四半世紀近くが過ぎていた。言ってみれば、彼は『草の葉』の詩人としての始まりと終りに西部を体験したのである。

ホイットマン研究の幅の広さと層の厚さを考えると、彼と西部に関するまとまった研究は意外に少ない。比較的早い時期のものとしては、論証なしの指摘にとどまっているものの、コンスタンス・ルアークの『アメリカン・ユーモア』（1931年）があげられる。彼女はこの中でホイットマンの一度目の西部旅行は感受性の強い時期の体験ゆえにそこで得た印象は彼の詩全体に現れ、詩人としての彼の衝動の多くがこの西部体験から生じることになったと言及した¹⁾。もちろん直接の体験以外にも西部の経験は存在し、東部人のホイットマンにとってはジャーナリズムや文学で表現された西部こそ西部経験の中心であったとも言える。ヘンリー・ナッシュ・スミスは神話あるいは象徴としての西部を扱った『ヴァージン・ランド』（1950年）の中で、こうした見地からホイットマンをアメリカの帝国主義的な西部進出思想の中に位置づけ、当時のそうした思潮を最も明快に表現した詩人とした。議論自体は5ページに満たないものの、これは影響力の大きな指摘となった²⁾。60年代に入るとエドウィン・フッサルが『フロンティア』（1965年）の中でホイットマンと西部の関係について一章を設けて論じたが、私が読み得た限りではこのテーマについて包括的とよべる唯一の研究であった。多くの例証をまじえつつ、彼はホイットマンが代表作品の中で歌った西部は19世紀前半の領土拡大期に生まれたメタファーとしての西部であったので、南北戦争後に現れた新しい現実としての西部は描きえず、結果的に過去の西部を生涯歌い続けることになったと論じた³⁾。最近では、『コロンビア・アメリカ合衆国文学史』（1988年）に代表されるアメリカ文学史見直しの動きの中でベスティ・エアキラがホイットマンと西部の関係に焦点を当て直している。彼女は『草の葉』で自然人あるいは普遍的存在として歌う詩人の裏に偏狭なナショナリズムと差別意識があると指摘